《論文》

〈呼応／響ー鳴〉についての一考察

鳥居　雅志

はじめに

「ケア」「ケアリング」に関する研究の先駆者と言えるであろうミルトン・メイヤロフ。その著書である“On Caring”（1971）は日本でも翻訳されて出版されているが、そのタイトルは『ケアの本質―生きることの意味』と訳されている。これは一見、訳者である田村真と向野宣之による意訳のし過ぎであるように思われる。しかし、本書を読めば、そのようにタイトルを訳したのは、内容に即してのことであることが分かる。本書においてメイヤロフは、ケアということを語ることによって、われわれを人間本性へと導こうとしている。そのことは本書後半にあるメイヤロフの言葉から窺うことができよう。

> ある人の人生においてケアが果たす役割と、包括的ケアを通じて全人格的に統合される人生の本質について考察してみたい。[Mayeroff, 1971, p.65.（110 頁。）] (1)

> 私と補充関係にある対象を見い出し、その成長をたすけていくことをとおして、私は自己の生の意味を発見し創造していく。そして補充関係にある対象をケアすることにおいて、“場の中にいる”ことにおいて、私は私の生の意味を十全に生きるのである。[Mayeroff, 1971, p.76.（132 頁。）]

> 自己の生の意味を生きることは、私と補充関係にある対象をケアすることにより“場の中にいる”ということである。…〔中略〕…こうした生が私自身の生であり、自分の存在に根ざしたものであって、決して自分とかけ離れたものではないことは明確である。[Mayeroff, 1971, p.77.（133-134 頁。）]

われわれが生きるというのは、どうしても他者と共に生きるということを意味する。そして「相手とともにいるということは、とりもなおさず相手のためにいるということでもある」[Mayeroff, 1971, p.54.（95 頁。）]。「ケアすること」という生き方は、他者とのそうした関係を生きるということを意味している。メイヤロフにとって「ケアすること」とは「生きることそのもの」であり、そうした生き方をしていることによって、われわれは世界から意味を与えられる。そうした生を生きることこそが、われわれの生なのである。メイヤロフはそうしたことを本書によって示唆している。

ところで、われわれは、所謂「ケアの関係」とは言えないであろう関わり方で、他者と共にいてしまっていることもあるのではないだろうか。いや、もしかしたら、そうした場合の方が多いかもしれない。だが、そうした関わりに於いても、われわれは互いに何らかの影響を与え合ってはいるのではないか。それでは、われわれは何処に、どのようにあるのであろうか。

こうした問いを念頭に置き、本稿では、まずはメイヤロフのケアリング論を、そこで語られている「ケアすること」「場の中にいる」という二つの概念に着目しながら概観する。その後、そうして概観することによって出てきた疑問を、主に上田閑照（宗教哲学者・哲学者）の「二重世界内存在」論に依りながら検討し、われわれはどのようにあるのか、われわれの生のあり様を試考してみたい。

Ⅰ．メイヤロフのケアリング論

メイヤロフはその著書“On Caring”の目的を次のようなものだとしている。

> この小著は、互いに関連する二つの主題をあつかっている。一つは、ケアすることを一般的に記述することであり、もう一つは、ケアすることがどのようにして全人格的な意義を持つか、その人の人生にどのような秩序づけを行うかを説明することである。“ケアすること”と“自分の落ち着き場所にいる”という二つの概念は、人間であることについて実りある考え方を提示してくれる。そしてそれ以上に大切なことは、この概念は、私たち自身の生を自分たちがもっとよく理解するのに役立つということなのである。[Mayeroff, 1971, p.3.（16 頁。）]

メイヤロフは本書で、われわれの生き方がどのようにあるのか、その生で起こっていること、われわれの生がどのように意味づけられるのか、その生において重要なことを、「ケアすること（Caring）」と「場の中にいる（“In-Place”）」という二つの概念を扱うことによって提示しようとしている。

その二つの主題がどういったものであるのか、順番に見ていくこととしよう。

1.「ケアすること（Caring）」

メイヤロフは、「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすけることである」[Mayeroff, 1971, p.1.（13 頁。）] としている。メイヤロフは、その例としてわが子をケアする父親を挙げている。父親はわが子の成長には自分が必要だと感じ、その子を尊重しつつ、「その子の成長したいという要求にこたえることによって、その子が成長するのをたすける」[Mayeroff, 1971, p.1.（13 頁。）]。

親が子を、教師が学生を、ケアする。ところで、ケアと聞けば一般的には対象は人間であると考えるかと思うが、メイヤロフは、ケアの対象を人間に限ってはいない。例えば哲学者にとっての哲学的概念も、芸術家にとっての作品もケアの対象となりうるのである。

さて、メイヤロフはケアの対象が何であれ、その対象にどんな重要な違いがあったとしても、ケアすることには共通のパターンがあるとしている。その共通点とは、「他者が成長するのを援助する」ということである。ケアすることの中で私は、そのケアする対象――それが一人の人格であろうと、概念や芸術作品であろうと、共同社会であろうと――を自分自身の延長として、かつ掛け替えのない価値を持っている独立したものと感じる――これは自分自身がケアの対象となる場合も同様で、自身をケアするためには、自分自身を他者として感じとることができなくてはならない――。またケアするときに私は、その対象である他者は種々の可能性と成長する欲求を持っており、その成長のためには私が必要なのだと感じる。更に、他者の発展が自分自身の幸福感と結びついていることも感じる。そして、「他者が成長するのを援助する」こととしてのケアすることにおいて、私はケアの対象である他ならぬこの他者の成長が持つ方向に導かれて、そしてこの他者の必要に応じて専心的に応答するのである。

ところで、メイヤロフはケアの対象が何であれ「他者が成長するのを援助する」という共通のパターンがあるとしているが、その援助によってなされる成長とはどのようなものであるかについて、その対象が人である場合と人以外である場合を区別して述べている。

ケアする対象が人である場合、その人が成長するとは、「その人が新しいことを学びうる力を持つところまで学ぶことを意味」しており、その学びとは「知識や技術を単に増やすことではなく、根本的に新しい経験や考えを全人格的に受けとめていくことをとおして、その人格が再創造されること」である [Mayeroff, 1971, p.13.（29 頁。）]。

では、ケアする対象が人以外である場合はどうか。例えばそれが哲学的

概念の場合、成長するとは、その概念が持つと考えられる本質的な要素が発見され、その適応範囲が広く且つ明確になることによって他の概念と結びついていき、その結びつきが強くなっていくことによって確りとした織物を織りなしていくことを意味している。メイヤロフはこうした概念の変化と展開を成長として捉えている。

メイヤロフは、ケアすることの主要な要素を幾つか挙げている。まず、ケアするためには多くの知識が必要になる。ケアする者は、その対象の要求していることを理解しなければならないし、それに適切に対応しなければならない。そうしたことに必要なことをわれわれは明確に――言語表現が可能な仕方で――知ることもあれば、暗黙に――言語表現が不可能な仕方で――知ることもある。また、それを知っているだけなのか、それともそれをどうするかをも知っているのかということは同じ事ではない。また、直接的に知っていることなのか間接的な情報としての知識なのかも同じことではない。直接的に知るということは経験したということだけを意味するのではなく、その対象を理解し、その独立性と個別性を尊重することである。ケアはこれら全てを含んでおり、「それら全体は、他人の成長を援助するうえでさまざまに関係している」のである [Mayeroff, 1971, p.21.（37頁。）]。

また、われわれは単なる習慣に従って行っただけではケアすることはできない。対象の状態や状況に合わせて、そして自分の行動がもたらした結果を鑑みて、その都度適切に自分の行動を変えていく必要がある。場合によっては、対象の成長を信じ、自らの好機を見つけ出せるように対象に時間を与えることも必要になる。また、ケアする中で本当に対象を忠実に見ようと努力しているか、自分の欲していることをしてしまっていないか、時々刻々と変わっていくその要求に応えようとしているかなどのことを、自分と向き合い、心を開いて確認する必要もある。ケアする者はケアすることを通して、自分の能力だけでなく、自分の限界を理解できるようにな

る。そして自らの能力をうまく活かしていくことができるようになる。そして対象が成長していけるという希望を持ち、未知の世界に踏み込むことになる。

こうしてケアする者は、その対象の成長を援助することによって、自らも成長し、自己を実現することになる。「ケアにおいては、他者が第一義的に大事なものである。すなわち、他者の成長こそケアする者の関心の中心なのである」[Mayeroff, 1971, p.39.（68 頁。）]。しかし、ケアする者は、対象をケアすることにおいて、その成長を援助することにおいて、「信頼、理解力、勇気、責任、専心、正直に潜む力を引き出して、私自身も成長するのである」[Mayeroff, 1971, p.40.（69 頁。）]。ケアの対象にとってケアする者が必要なだけではなく、ケアする者にとっても、自分が自分であるために、そして自分が成長するために、ケアの対象である他者が必要なのである。

2.「場の中にいる（"In-Place"）」

メイヤロフはケアの主な特質をどのように考えているのか。それは、今、目の前にいる対象に心を奪われ、その成長を援助することに専心し、自己の持てる全てを対象に集中させて対象に寄り添うというあり様である。そのようにして関係が築かれ、そうした中でケアが行われていくことによって、そのケアの対象である他者は成長し、その範囲を拡げ、他のものと結びつき、世界を織りなしていく。その中でケアされるものだけでなく、ケアする者も成長し変化していく。

> 私のするケアが十分包括的なものであるならば、このケアは私の生活のあらゆる領域に深くかかわってきて、実りある秩序を提示する。このような具合に、ケアはある中心となるものを設定するのであり、そのまわりに私の活動や経験というものが全人格的に統合されてくるのである。このことは、奥深くたたえられている世界に対して自己を調

和させる結果となる。[Mayeroff, 1971, pp.66-67.（112-113 頁。）]

また、メイヤロフは次のようにも言う。

> 一人の人間の生涯の中で考えた場合、ケアすることは、ケアすることを中心として彼の他の諸価値と諸活動を位置づける働きをしている。彼のケアがあらゆるものと関連するがゆえに、その位置づけが総合的な意味を持つとき、彼の生涯には基本的な安定性が生まれる。すなわち、彼は場所を得ないでいたり、自分の場所を絶え間なく求めてたださすらっているのではなく、世界の中にあって、「自分の落ち着き場所にいる」のである。他の人々をケアすることをとおして、他の人々に役立つことによって、その人は自身の生の真の意味を生きているのである。この世界の中で私たちが心を安んじていられるという意味において、この人は心を安んじて生きているのである。それは支配したり、説明したり、評価したりしているからではなく、ケアし、かつケアされているからなのである。[Mayeroff, 1971, pp.2-3.（15-16 頁。）]

何らかの対象のケアに携わっていると、そのケアの対象を中心に周辺の活動や価値が自ずと序列化されてくる。その秩序が生活の全体を統合するようになったならば、そのケアは「全面的・包括的ケア」と呼ばれる。われわれはそうした全面的・包括的ケアによって、われわれの生を秩序立てることを通して、この世界で「場の中にいる」のであるとメイヤロフは言う。

その「場」は、ケアの対象である他者の要求に応答することによって創造され、絶えず新しくなっていき、再確認されるものであって、前もって用意されているものではない。また、その「場」は、ケアする者とケアされるものとの関係を生起させるはたらきであり、力動的なものであって実体的なものではない。そうした「場の中にいる」ケアする者は、ケアされるものが成長していくことを助けるとともに、そのことによってケアする

者もまた成長していく。こうした「場」に於いて相互に変容／成長し合い、ケアする者に全人格的に統合された生を、その生の意味を十全に生きることを可能にする全面的・包括的なケアの対象を、メイヤロフは、ケアする者と「補充関係にある対象」（Appropriate others）と呼んでいる。

「場の中にいる」ケアする者である私は、自分と補充関係にある対象に呼びかけられている。それは使命（Calling）と呼ぶこともできるかもしれない。私は補充関係にある対象によって必要とされている。私は補充関係にある対象を委ねられている。そういった事実からくる帰属感によって、私は世界に根を下ろした状態として安定する。そうした安定した状態は、開かれた存在として他を受容できる状態でもある。そして存在の持つ神秘そのものに触れることによって、自己の生の意味を実感することができる。このようにして「場の中にいる」とき、人は自律する。「自律（Autonomy）ということは、私が自己の生の意味を生きることである、と言い換えられる。というのは、それは、私が生きている社会的・物質的条件によって設定されたある範囲の中で、私が自分の思うままに生きることを指すからである」[Mayeroff, 1971, pp.94-95.（161 頁。）]。ここで言われている「自己の生」とは、自分の好き勝手に使用できる所有物としての生を意味するわけではない。「“自分自身の生”を生きるためには、私はケアすることと自分の生に対し責任を持つこととをとおして、私の生を自分自身のものとしなければならない」[Mayeroff, 1971, p.95.（162 頁。）] とメイヤロフは言う。また次のようにもメイヤロフは言う。

> 自律といっても、これは他のものから離れていることを意味したり、強い結びつきのない状態を指したりするのではない。かりに自律が離れていることを意味するならば、他者と共存したり、強い結びつきを持つということは、必然的に私をがんじがらめにし、私をとりこにすることを意味することになろう。さて一方、自律とは自己の殻に閉じこもり、“小鳥のように自由に”ふるまうことでもない。それどころか、

私は他者に専心しているがゆえに、また他者と依存関係にあるがゆえに、自律的であり得るといえるのである。[Mayeroff, 1971, p.95（162-163頁。）]

私が自己の生を生きるのは、私が他者に、補充関係にある対象に依存していればこそである。私は「自分と補充関係にある対象の成長を援助する中で、自分自身もまた成長していくからこそ、私は自律的であり得るのである」[Mayeroff, 1971, p.96.（164頁。）]。つまり、私が「場の中にいる」ということ、そして補充関係にある対象をケアしていることにより、私は自律し得ているのであり、自己の生を生きる事ができているのである。「場の中にいる」とき、そして補充関係にある対象をケアしているとき、私は世界に根ざして安んじて生きる事ができる。このように信じられるのは、人生と意味深い関わりをもつからこそである。「場の中にいる」私は、補充関係にある対象をケアすることによって、その補充関係にあるケアの対象者から自分が「場の中にいる」ことに気づかせてもらえる。そうして、私を支えてくれている世界において、私は補充関係にある対象をケアすることによって、人生への感謝を表明するのである。

メイヤロフにとって、人が生きるということは、ケアをする生き方と結びついている。そして生きることの意味とは、そうしたケアをすることから与えられてくるのである。

ここまでメイヤロフの“On Caring”において二つの柱となっていた「ケアすること」と「場の中にいる」という主題について見てきた。メイヤロフはこの二つの主題によって、そして「ケアの関係」という「場」から、生きるということの本質を提示して見せた。

ところで、それでは「ケアの関係」にない対象はどうなるのであろうか。私にとって他者はケアの対象になるのであろうか。他者は、私が属しているところの外部にいるからこそ、私には理解不能だからこそ、他者なので

はないか。「ケアの関係」を軸にした上記のまとめでは、こうした疑問が当然起こってこよう。では、メイヤロフは、そうしたことを考慮していなかったのだろうか。「ケアすること」において、私はどのような他者と、どのように関わっているのだろうか。

Ⅱ.「ケアすること」において私は他者とどのように関わっているのか

メイヤロフにとって、私と「他者」とはどのような関わりを持ちうるのであろうか。メイヤロフは、他者をケアするには、「その人とその人の世界を、まるでその人になったように理解できなければならない」[Mayeroff, 1971, p.53.（93 頁。）] と言う。メイヤロフの扱う他者は、私の理解できる相手であり、ケアするために多くを知る必要のある相手である。そしてケアすることの中においては、より身近なものとして感じるようである。そうした他者との関係を表しているメイヤロフの文章を三つ引用しよう。

> ケアの相手が成長するのをたすけることとしてのケアの中で、私はケアする対象（一人に人格であったり、理想であったり、思いつきであったり）を、私自身の延長のように身に感じとる。またそれと同時に、その対象が本来持っている権利ゆえに私が尊重する確かな存在として、私とは別のものとしてそれを身に感じとるのである。[Mayeroff, 1971, p.7.（18 頁。）]

私は他者を自分自身の延長と感じ考える。また、独立したものとして、成長する欲求を持っているものとして感じ考える。さらに私は、他者の発展が自分の幸福感と結びついていると感じつつ考える。そして、私自身が他者の成長のために必要とされていることを感じとる。私は他者の成長が持つ方向に導かれて、肯定的に、そして他者の必要に応じて専心的に応答する。[Mayeroff, 1971, pp.11-12.（26 頁。）]

> 他者が成長していくために私を必要とするというだけでなく、私も自分自身であるためには、ケアの対象たるべき他者を必要としているのである。[Mayeroff, 1971, p.40.（69 頁。）]

ケアすることの中において私は、他者を自分自身の延長であるかのように感じる。しかし同時に、他者は私とは別の存在であり、私が尊重すべき存在である。私はそうした独立した他者に必要とされ、それに対して専心的に応答する。私は、ケアすることの中においてケアする対象である他者がいてこそ、私でありえている。

また、「ケアすることは発展的過程を指して」おり、深みのある関係が形成されるには時間がかかる [Mayeroff, 1971, p.44.（78-79 頁。）]。そうした長い時間をかけた中でも、他者を知り尽くしてしまうということは「ケアとは無縁である」[Mayeroff, 1971, p.30.（56 頁。）]。それ故、他者を支配したり、所有化したり、ある一定の理解枠組で扱うということもない。

> ケアにおいては、私は他人を直接的に知るのである。私が他者とともに経験する連帯感の中で、私はいつもその相手の独立性と個別性をわきまえているのである。たとえばケアする教師は、自分の学生を一個人として直接的に知るのである。その教師は、学生を彼自身の権利において存在している人物と感じとっているのであり、ある固定的な定型として片付けたり、その教師の意見の代弁者に仕立て上げたりはしない。[Mayeroff, 1971, p.20.（36-37 頁。）]

私は「ケアする相手の存在の独立性を、他者は他者なのであるとして、尊重する」[Mayeroff, 1971, p.27.（50 頁。）]。しかし、こうした関係／出来事が無視、または拒否されることがある。いや、社会生活を送る際には、むしろその場合の方が多いようにも思われる。だが、ケアすることの中にいる者は、そういった事態に陥ることはないとメイヤロフは注意深く何度

も述べている。次の文章もその事を表している。

> もし私がある一つのやり方だけで、その人を見つめなければならないならば、また、もし自分が見たいと思うものしか見ることができないならば、私は本当の相手の姿を見つめることはできないであろう。たとえば、ある人を偶像視することは、ケアすることを妨げてしまうことになる。というのは、この当の相手に本当に呼応することが不可能となってしまうからである。不愉快であっても、事実に対して私は敬意を払う。なぜなら、それらを真面目にとらえることによってのみ、私はその人に触れることができ、ケアすることができるからである。[Mayeroff, 1971, p.25.（47 頁。）]

ここまでメイヤロフが「他者」をどのように扱っているかを見てきた。メイヤロフは「ケアの関係」においても、他者は決して知り尽くされることはなく、私に所有化されることはないということについて注意深く言及していた。しかし、やはりメイヤロフは、他者をケアの対象として関わりうる相手として捉えているように思われる。この他者は独立したものとして感じとられるが、それでも理解され、私の延長であるとも感じとられる。この他者はケアしケアされることによって「私の落ち着き場所」を共に形成していく相手なのである。

しかし、メイヤロフが考えている以上に、他者には私とは相容れない面や何処までも私から逃れていく面があるのではないだろうか。それは芸術作品においてもそうであろうし、私自身にも当て嵌まるところがあるだろう。そして相手が人間であれば尚更ではなかろうか。そういった何処までも私から逃れていく他者、私の安定を脅かしかねない他者、「場の中にいる」私は、そうした他者の他者性をどのように扱うのだろうか。

Ⅲ.「〈場〉の中にいる」―〈呼応／響ー鳴〉関係として

一人の人間の生涯の中で考えた場合、ケアすることは、ケアすることを中心として彼の他の諸価値と諸活動を位置づける働きをしている。彼のケアがあらゆるものと関連するがゆえに、その位置づけが総合的な意味を持つとき、彼の生涯には基本的な安定性が生まれる。すなわち、…（中略）…世界の中にあって、「自分の落ち着き場所にいる」のである。他の人々をケアすることをとおして、他の人々に役立つことによって、その人は自身の生の真の意味を生きているのである。この世界の中で私たちが心を安んじていられるという意味において、この人は心を安んじて生きているのである。[Mayeroff, 1971, pp.2-3.（15-16 頁。）]

ケアに従事することによって、そのケアの対象を中心に周辺の活動や価値が自ずと序列化されてくる。その秩序が生活の全体を統合する全面的・包括的ケアを通して自己自身の生を生きることを、「場の中にいる」とメイヤロフは言い表していた。「場の中にいる」私は、私の全面的・包括的ケアを通して秩序立てられた世界において、自分と補充関係にあるケアの対象から呼びかけられている。私は補充関係にある対象によって必要とされている。私は補充関係にある対象を委ねられている。私は世界から必要とされているのである。そういった事実からくる帰属感によって、私は世界に根を下ろした状態として安定する。私はそのように生きられること／生かされていることに感謝し、「場の中にいる」私のケアは、その世界において感謝の表明となるのである。

ところで、この世界は私のケアによって秩序立てられた世界であり、そこで私が私自身であることの根本的な明澄性を獲得するには、「私のケアと相容れない多くの不適切なものが排除され」[Mayeroff, 1971, p.86.（145 頁。）] なければならないとメイヤロフは言う。また、「自分のケアと両立

できないもの、無関係な多くのものを除外すると、私にとって重要なものがくっきりと浮彫りにされ、自分はいったい何者であり、何をしようとしているのかについて、私は一層気づくようになれるのである」[Mayeroff, 1971, p.94.（159-160 頁。）] や「雑然としたものを排除していくことにより、私は生の持つはかり知れない性格について、はっきりと気づくことができるようになる」[Mayeroff, 1971, p.94.（160 頁。）] とも述べ、ケアの関係によって秩序化された世界とは相容れないものは排除すべきとしている [(2)]。

何故このようなことになってしまうのだろうか。

ここで、この疑問を解く鍵となるように思われる上田閑照の「二重世界内存在」論を見てみたい。

> 我々は他者と交わり物事と関わりつつ生きている。生きえている。それは、交わりや関わりの場所が開かれていて、その場所の開けに我々の存在が開かれているからである。西田幾多郎の術語を借りて言えば、我々の存在は場所に「於てある」存在であり、場所とは「我々の居る場所である」。我々にとってそのつどの場所は、家庭とか学校とか都市とかヨーロッパとかシベリアとか、あるいはまた、自然とか社会とか歴史とか、あるいはまた産業界とか文学界とか空想界とか、限られた特定の意味空間（それぞれの時間的・歴史的ないし超歴史的連関もふくめて）である。その場合、場所ということ自身の性格からして場所と場所が並び、それがまた別の場所に於てあるというように入り組んで多元的重層的になっている。そのような事態の総体の場所、すなわちさまざまな場所を包括する最終的な場所、諸場所の場所、我々にとっての包括的な意味空間、それが世界と言われるものである。[上田、2002 年 a、18-19 頁。]

われわれの世界は、多くの意味空間が意味連関することによって織りなされた包括的な開けである。しかし、こうした意味連関の総枠としての世

界は、意味を持った空間として囲われている故、有限な開けである。しかし、そうした「限りある開け」があるということは、それが於てある「限りない開け」がなければならないと上田は言う。

> 我々が世界の内にあるということは、従って、無限の開けに「於てある」世界に「於てある」（二重の「於てある」）ということ、我々の居る場所は場所として最終的に二重になっているということである。[上田、2002 年 a、20 頁。]

また、上田は次のようにも言っている。

> 世界内存在としての当の主体に、世界のこの二重性（すなわち有限性と、有限であることが限界の外から包まれていることであるという二重性）が常に自覚されているわけではない。むしろ通常自己は、世界という「意味の枠」の内に自ら閉じこもって、しかも、それでも世界が開けであるその開けをあたかもそのままで無限の開けであるかのごとくに思いなして世界内存在している。そのようにさせているのは意味連関としての世界の枠そのものではない。そうではなくて世界内存在としての主体をその底から握りしめている「我（が）」性とも言うべきものである。それによって、世界内存在としての自己は世界を自己の世界として主体化するというにとどまらず、世界を私の世界として固守しようとする。[上田、2002 年 b、20-21 頁。]

この上田の論を受けるならば、メイヤロフの「場の中にいる」私は、世界の二重性に気づくことなく、それ故、自らのケアによって秩序立てられた世界を無限の開けであるかのように思い、その世界を固守しようとしているということになろう。

メイヤロフは自らの世界を固守しようとしているわけではなく、具体的

なこの他者をケアの対象としているのだ、という反論はあり得よう。しかし、この他者は、混乱と騒音を来す他者として排除されてしまう可能性があるように思われる。

このように見てくると、自分とは相容れない不適切なもの、混乱・雑然としたものは排除すべきものなのかどうかが疑わしくなってくる。本当に他者の他者性は排除すべきものなのだろうか。メイヤロフはケアの対象の成長について、「根本的に新しい経験や考えを全人格的に受けとめていくことをとおして、その人格が再創造される」[Mayeroff, 1971, p.13.（29 頁。）]と語っていた。しかしこの再創造は、他者性によっても、いやむしろ他者性によってこそ起こることなのではないのだろうか。

このような自らの世界とは相容れないような他者性との経験を、ヴァルデンフェルスは普通の応答とは違う方法で応答する仕方について検討している。

> 異他的なものとは、私と、私たちにとって、いまだ自分自身をそこに再確認しえないようなものである。…〔中略〕…
>
> いわば事象それ自身に属しているラディカルに異他なるものは、「接近不可能なものの接近」や「帰属不可能なものの帰属性」という定式化で表現されるパラドクスとしてのみ考えられている。そうしたパラドクスがその性格を失うのは、接近不可能性や帰属不可能性によって告げられている不可能性が、単なる知識や能力の限界へと還元されるときであり、同様に、それらの限界が、私たちの身体的な成り立ちや言語的な能力の偶然性、歴史的に状況づけられていること、もしくは社会文化的な秩序の選択制や規則づけられたシステム、さらには自らで規則づけるシステムの容量の限界性などに関連づけられる場合である。それに対して私は、異他性の経験を、どこか別のところで始まる応答として理解するように試みている。[Waldenfels, 2002, S.187.（209 頁。）] (3)

「異他なるものが、つまずきの石になりうるのは、パトスや裂け目、侵入が、自己を自ら自身に、しかし決して完全な仕方ではないが、自己自身の助けになることによって初めてそうなる」[Waldenfels, 2002, S.188.（210頁。）] のである。そして「私たちが遭遇し、それによって襲われる当のものは、単純に私たちの活動範囲や、能力の外部に存在しているのではなく、そこにおいて、それを受けて苦しむ自己が、自ら自身の外部になってしまうことのうちにある」[Waldenfels, 2002, S.188.（210頁。）]。ここで言われていることは、次のように言い換えられるかもしれない。

> 私たちは他者との関わりにおいて常に「限界」を持ち、自分や、その誰かから目をそらして逃げてしまう「弱さ」を持っています。ですが、それらは関わりの可能性でもあるのです。「弱さ」は人を他者へと向かわせ、「限界」は相手を支配することから人を守って、そして、目の前の相手に誠実に応えていくことを促していきます。そうやって、他者のもとに踏みとどまって、そのままを受け入れあう時、「限界」の向こうでそれぞれの苦しみは突破されていくのです。それらは、「関係の種子」として私たちのなかに宿っています。[グェンティ、2009年、32頁。]

他者に対する忌避感は、自らの世界に閉じてしまった私の「限界」から起因する「弱さ」から来るのであろう。しかしその「弱さ」は、他者からの呼び声が私の内で響いているからこそ生じるものなのかもしれない。私の内なる響きは、私の世界の崩壊を予告する。それ故、私はそれを自らと相容れないものとして排除してしまうかもしれない。しかし、もしも私がそうした自らの「弱さ」を自覚したならば、そして呼び声／響きに応えたならば、他者との「限界」は「限界」のまま、私が全てだと思っていた自らの世界が開かれ、そこに世界を超え包む無限の開けが現前してくるかもしれない。もしもそうだとするのであれば、呼び声は、われわれの世界が

閉じてしまっていることに対する世界を超え包む無限の開けからの警鐘／呼び声であるのかもしれない。その呼び声は、他者の呼び声と重なり、その呼び声に応えるように私の身体に響く。われわれの生は、そのような関係に於いて生起しているのではないだろうか。

おわりに

本稿では主にメイヤロフのケアリング論の二柱とも言える「ケアすること」と「場の中にいる」という概念について検討した。メイヤロフの「場の中にいる」私は、世界からの呼び声に応えることによって、世界に根を下ろして安心を得ていた。しかし、その安心は、閉じた世界のものであったかもしれない。私は私の世界にいるとき、その私の世界が全てであると思ってしまう。あるいは私の世界を基準に他の全てを序列化してしまう。その場合、その世界にそぐわない他者の他者性は排除すべきものとなるであろう。

われわれは共に生きている。しかし、常にケアの関係にあるとは言えない。私は他者と共にいることによって違和感や忌避感を覚え、それを避け、時として排除しようとする。しかし、その違和感や忌避感は他者による呼び声が私の内で響いていたからなのかもしれない。私の世界は、他者の呼び声によって、その呼び声が私の内に響くことによって一度崩壊する。しかし、崩壊した後に再び／新たに創造される。こうしたことがあり得るのは、私の世界が無限の開けに「於いてある」からであろう。私が呼び声／響きに応えることができるのは、そうした無限の開けに於いて、私の世界に裂け目を入れる他者の呼び声に気づき、それに向き合うことによってのみなのではないだろうか。

メイヤロフは、「私は、自分と補充関係にある対象の呼びかけにこたえるという意味で、使命（コーリング）を持っている」[Mayeroff, 1971, p.78.（135 頁。）] と言っているが、われわれが共に生きるということは、こうした水平方向からの呼び声とともに垂直方向からの呼び声にも応えていくということに於

いてあるのであろう。

註

(1) メイヤロフの引用に関しては、邦訳書の『ケアの本質』を用いる。また、引用文中の傍点は全て訳者によるものであり、原書ではイタリックで記されている。

(2) ただし、メイヤロフは、ケアにおいて相手に本当に呼応するには、「不愉快であっても、事実に対して私は敬意を払う」必要があると述べている [Mayeroff, 1971, p.25.（47 頁。）]。また、「私が“場の中にいる”ということは、“場の中にいる”ことから他の人たちを排除することを前提としているのではない」[Mayeroff, 1971, p.70.（119 頁。）] と述べ、われわれにはしばしば否定的な匂いのあるものを無視する傾向のあることを指摘して、そのことを批判している [Mayeroff, 1971, p.84.（142 頁。）]。メイヤロフがこのように述べていることは無視し得ないが、それでも、ケアの関係によって秩序化された世界に混乱をもたらす雑然としたものについてメイヤロフが肯定的に捉えているとは言いがたいことは確かであろう。

(3) 以下、ヴァルデンフェルスの引用に関しては、邦訳書の『経験の裂け目』を用いる。また、引用文中の傍点は訳者によるものであり、原書ではイタリックで記されている。

引用文献・主な参考文献

上田閑照、2002 年 a『上田閑照集』第 9 巻、岩波書店。

上田閑照、2002 年 b『上田閑照集』第11巻、岩波書店。

グェンティ・ホンハウ、2009 年「弱さの交差点で」日本ホリスティック教育協会・吉田敦彦・守屋治代・平野慶次編『ホリスティック・ケア—新たなつながりの中の看護･福祉･教育—』せせらぎ出版、23-33 頁。

後藤恭子、2009 年「教育におけるケアリング再考—メイヤロフのケアリ

ング論を中心に」カトリック教育学会『カトリック教育研究』26 号、39–52 頁。
杉山直子、2012 年「ケアに関する教育学的考察―教師におけるケアリング―」『梅光学院大学紀要　梅光学院大学論集』45 巻、1–10 頁。
高橋隆雄、2013 年「メイヤロフ:ケア論への道」熊本大学倫理学研究室『先端倫理研究』7 巻、111–126 頁。
中野啓明、1999 年「メイヤロフとノディングスの分岐点」新潟青陵大学・新潟青陵短期大学部『新潟青陵女子短期大学研究報告』第 29 号、71–80 頁。
西田絵美、2015 年「メイヤロフのケアリング論の構造と本質」佛教大学大学院『佛教大学大学院紀要　教育学研究科篇』第 43 号、35–51 頁。
藤原治美、1990 年「ミルトン・メイヤロフのケア論と看護」『京都大学医療技術短期大学部紀要』別冊、健康人間学 2 巻、15–20 頁。

Buber, Martin, 1974(1923), *Ich und Du*, Lambert Schneider/ Gütersloher Verlagshaus GmbH, Gütersloh.
Heidegger, Martin, 2001(1927), *Sein und Zeit*, Max, Niemeyer Verlag.
Mayeroff, Milton, 1990(1971), *On Caring*, Harper & Row.（1987 年、田村真・向野宣之訳『ケアの本質―生きることの意味』ゆみる出版。）
Noddings, Nel, 1984, *Caring: A Feminine Approach to Ethics & Moral Education*, University of California Press.
Noddings, Nel, 2002, *Starting at Home: Caring and Social Policy*, University of California Press.
Waldenfels, Bernhard, 2002, *Bruchlinien der Erfahrung: Phänomenologie, Psychoanalyse, Phänomenotechnik*, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main.（2009 年、山口一郎監訳『経験の裂け目』知泉書館。）

（立教大学兼任講師・JICE 研究員）